

内戦が続くソマリアと国境を接するジブチの難民キャンプで、日本の医療援助団体の支援を受けた難民やジブチ人たちが自主的な医療活動を進めている。「アフリカの角」地域の北東部、紅海の入りに位置する小国ジブチ。火山性の砂漠が大部分を占め、砂ぼこりが舞う乾燥した大地が続く。ソマリアや

## ジブチ 難民キャンプ

エチオピアとの国境近くにある四つのキャンプには、小さなテントがひしめき、内戦を逃れたソマリア人ら難民約三万三千人が住む。栄養障害や下痢による脱水症状が多く、難民らは「安全な飲み水がない」と口をそろえる。昨年十月にはコレラも流行し、一年で約三百人が死亡した。

# 自主的な医療活動定着

ジブチ政府から要請を受けたアジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山）は昨年三月から医師と看護婦の派遣を始めた。各キャンプにはれんが造り、テント形式の栄養補給センター

などが建てられ、毎日百人以上の病人や子供を連れて母親が訪れる。医師らは国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、政府難民局と協力しながら、毎日キャンプを車で巡回。現在は日本を含めアジア四カ国の医師四人と看護婦一人が各キャンプの難民やジブチ人スタッフ約二十人と協力し、患者の診療

療、子供の予防接種や母乳の保健衛生指導をしていく。内戦のソマリアで夫が行方不明になり、娘二人を連れて逃げてきたファチユマ・アハメッド・フルさん

「心は、栄養補給センターで子供の世話や母親の育児教育を担当。AMDAは多くの病人や子供を救って、毎日キャンプを車で巡回。現在は日本を含めアジア四カ国の医師四人と看護婦一人が各キャンプの難民やジブチ人スタッフ約二十人と協力し、患者の診療

「心は、栄養補給センターで子供の世話や母親の育児教育を担当。AMDAは多くの病人や子供を救って、毎日キャンプを車で巡回。現在は日本を含めアジア四カ国の医師四人と看護婦一人が各キャンプの難民やジブチ人スタッフ約二十人と協力し、患者の診療

## AMDA (本部岡山) から支援

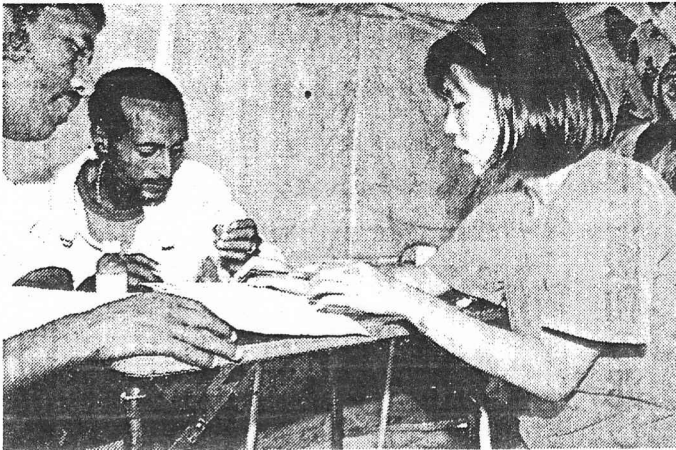
いけれど、子供に食事を与え、元気になっていく姿を見ると、敵しなんか忘れ

てしまう。私はソマリア人だから、ソマリア人のために働きたい。彼女には「無

事には看護士やヘルスワーカーなど現地の医療スタッフに当てる。現地語ができない医師らと患者や現地スタッフの通訳をするのも、英語が話せ

患者や子供の病状経過について、医師らと現地スタッフで情報交換が始まる。活動の中心は、難民やジブチ人たちだ。

「援助団体の役割は、現地の人たちが自分で判断し、対応できるように教え、自信を持たせることとです」と、母親と子供への保健指導を続ける看護婦の永野章子さん(左)と長野真由美氏。キャンプの生活は厳しいが、難民の自立は確実に進んでいる。



## 意欲的にこなす 現地のスタッフ

「みんなやる難民ら。「みんなやる」といふ意識はありませぬ。意欲的、動くことが喜びのよう

記者 平河直

永野章子さんと打ち合わせをするソマリア難民の医療スタッフ(左)と(右)月撮影

(文と写真 共同通信)

です」と日本人看護婦の河村よし乃さん(右)が話す。午前八時すぎ、AMDAの医師と看護婦がキャンプに到着すると、診療が現地スタッフによってほとんど終わっていることもある。医師は症状の重い患者を診断し、現地スタッフに処置を指導。患者や子供の病状経過について、医師らと現地スタッフで情報交換が始まる。活動の中心は、難民やジブチ人たちだ。